

舞踊運動の体感からみた基本感情の検討

天理大学 塚本 順子
 大阪女学院短期大学 原田 純子
 中京女子大学 猪崎 弥生
 東洋英和女学院大学 西 洋子
 神戸大学 前田正登, 柴眞理子, 小高直樹

1. 研究目的

本研究は「踊る技術の習熟と体感による舞踊運動の感情価との関係」というテーマに基づく一連の研究の中に位置するものである。共通するキーワードは「体感」であり、舞踊運動と感情の関連を踊り手の「体感」から探る、つまり舞踊運動の基本感情を体感から設定しようというのが本研究の目的である。

2. 研究方法

(1) 対象とする舞踊運動の設定

松本の7 motivesと、柴らの先行研究で得られた感情語に基づいて作成された24の舞踊運動との合計31について、舞踊家に踊ることを求め、その体感を得た。その体感に照らし合わせつつ、舞踊研究者と舞踊家の5人の討議により、20の舞踊運動に絞り設定した。

表1. 20の舞踊運動

力強い	やさしい	むなしい	激しい	明るい
粘った	鋭い	大きい	静か	楽しい
嬉しい	暗い	こわい	苦しい	厳かな
悲しい	喜び	嫌悪	固い	攻撃的な

(2) 体感評価実験

これら20の舞踊運動を、舞踊経験のあるダンス部の学生16人に踊らせその体感の記述を求めた。全員でビデオを師範として振り覚えした後、練習を行ない、一人ずつ踊り、すぐその場でそれぞれの舞踊運動を踊った時に感じられるものを感情語5つ以内で記入することを求めた。

(3) 結果の処理

それぞれの舞踊運動は、踊り手にどのように感じられたのかについて統計的処理を行ない検討した。統計処理にはSPSS11.5J, Categoriesを用い、体感から得られた感情語の親近性をみるためにコレスポネンス分析を行なった。

3. 結果

①グループに分類された感情語

今回の20の舞踊運動は統計学的に大きく分けて2グループになると読み取れた。第1グループは、厳かな・静かな・大きい・優しい・明るい・楽しい・嬉しい・喜びの8つの感情語群で、第2グループは、むなしい・粘った・暗い・こわい・悲しい・苦しい・嫌悪・力強い・激しい・鋭い・攻撃的な・固いであった。

これらを見ると、第1グループは明るい快感情であるのに対して、第2グループは暗い不快感情であると考えられる。統計上からみても、人間の大きな対極の感情に2分されたといえる。

②第1グループ内の感情語と舞踊運動の親近性

第1グループ間での感情語と舞踊運動の親近性をみるために、コレスポネンス分析を行なった結果、明るい・楽しい・嬉しい・喜びの舞踊運動が似ていると考えられ、優しい、大きい、静かな、厳かなについては、座標上に距離があることから、それぞれに独立した要素だと読み取れた。以上のことから、第1グループ間では5グループに分類できるという結果となった。

次に、感情語についてみると、楽しい・心が弾む・明るい・軽やか・かわいい・嬉しいが近く、優しい・あたたかい・やわらかい・包み込む等の感情語が、また穏やか・浮遊感・開放感が近いことがわかった。

これらがどのような要因によるかについて検討した結果、第1次元では興奮と沈静の対極の要素が、第2次元では弛緩と緊張の対極の要素がこれらの親近性を決定する要因ではないかと考える。

③第2グループ内の感情語と舞踊運動の親近性

第2グループでは、暗い・むなしい・悲しい・こわい・苦しい・粘った・嫌悪が1つ、力強い・激しい・鋭いがもう1つ、攻撃的な・固いで1つの計3グループに分類できる。

感情語については、速い・切る・強い・激しい・怒り・憎い等の感情語が近く、もがく・暗い・痛い・悲しい・苦しい・圧迫感等が近いことがわかった。

これらがどのような要因によるのかを検討した結果、第1次元では弛緩と緊張の対極の要素がかかり、第2次元では興奮と沈静の対極の要素が、これらの親近性を決定するのではないかと考える。

4. まとめ

以上の結果から、本研究で設定した舞踊運動は8つの異なる感情群の性質を有するグループに分類できることが、統計学的に明らかとなった。本研究では、踊り手自身が舞踊運動をどのように感じているのかを明らかにすることで、舞踊運動における基本感情を設定することが目的であった。今後は、この8つのグループの感情群と動きの関連について、それぞれに共通して内包される感情的質と動きの質の関係を明らかにすることが、次の課題だと考える。

<参考文献>

柴眞理子「体感による動きの感情価～舞踊経験者と未経験者の比較～」神戸大学発達科学部研究紀要 第10巻第2号 (2003)